当面のスローガン

- 本年こそ「人権侵害救済法」を制定させよう！
- 狭山再審闘争の勝利をかちとろう！
- 続発する差別事件の糾弾を徹底しよう！

解放新聞 和歌山版

発行所
解放新聞和歌山支局
〒640-8314
和歌山市神前 405-3
TEL 073-473-2301
FAX 073-473-2302
発行責任者
中澤敏浩

青年の行動に期待

和歌山全青

部落解放第57回全国青年集会が9月21日、22日、和歌山県民文化会館でひらかれ、県連から112人が参加、全国から348人が参加した。和歌山での開催は24年ぶり。

「狭山事件50年！青年が先頭に立ち、再審勝利に向け取り組み、人権・平和・環境を基軸とした部落解放運動を全国のなかまとともに創造・実践し、大きく前進させよう！」をメインスローガンに、今できる部落解放運動を全国のなかまと共有し、推しすすめていくことを全員で確認した。

湯浅の太鼓集団「心音」「初音」のメンバーによる太鼓演奏

主催者を代表して組坂繁之・中央執行委員長は「先の参院選では私たちと心をともに人権・平和・環境・民主主義を守ろうとする多くの議員が落選し、人権侵害救済法の制定が厳しくなった。しかし、人権派の議員とともに議員立法も視野にいれた制定へ力強くとりくんでいく」とあいさつがあった。

全体集会では、松井資喜・県連青年部長より全体発言として、県内の青年を取り巻く現状などを報告した。また「水平社宣言」を朗読した角野加奈・県連対策部（杭ノ瀬）は、一句一句に気持ちを込め、朗読した。

あいさつする組坂繁之・中央執行委員長

記念講演では、松本吉弘・県連教育文化運動部長が「今の青年に求めているもの」と題した講演をおこない、91年前の先人達に学び、地域の課題を解決するために、まず行動を。和歌山全青を契機に各地での青年の行動に期待したいと呼びかけた。

熱いメッセージを語る
松本吉弘・県連教育文化運動部長

分科会では「これからの青年部組織について考える」など4分科会がおこなわれ、青年部活動やひとづくり、まちづくり、生活実態など青年の課題を出し合い議論した。また「和歌山県水平社創立90周年～地域の歴史と水平運動に学ぶ～」と題したフィールドワークには、26人が参加した。

水平社宣言を朗読する角野加奈さん

心の中の差別意識、払拭するために

対和歌山市交渉

勤労者総合センターで8月30日、100人をこえる支部員が参加し、対和歌山市交渉をおこなった。

藤本哲史・事務局長の進行ではじまり、和歌山市ブロックを代表し瀧口秀光・議長は「2千人いる人権委員のメンバーの選任をしっかりしてもらいたい」とあいさつした。

大橋建一・市長から「差別は表面的に解消したようだが、人の心のなかに潜んでいる。今年は市に電話での地区問い合わせが1件もなかったが、それで差別がなくなったかといえばそうではない。市として誠心誠意答えるとあいさつした。

基本要求では、人権同和施策推進委員の役割について、副市長から施策の実施と指導に努めており認識を深め機能を果たしていくようすすめていくと回答があった。

また「人権課題現況調査」から5年が経過したが具体的なデーターをもとに施策をすすめていく基本的な姿勢を求めた。

次に、本人通知制度（登録型）導入にかかわって、職員と人権委員で5千人もいるにもかかわらず、登録者数は千人程度しかいない。職員が率先して登録をおこない、制度を知らない人に広報を周知徹底することを求めた。

また、戸籍謄抄本不正取得が県下で60件発覚したことを受け、県・市の共通認識をもって具体的にとりくむよう要求した。（2面につづく）

市としての姿勢を説明する大橋建一・市長

頑健

「記憶（記憶は、文明をつなぐ糸）の細い糸があるので文明は続いていく。ヒロシマを忘れてはいけない」これは、今年夏に来日したアメリカの映画監督、オリバー・ストーンが広島を訪問した際に、灯篭流しの灯篭に書いた言葉である▼ストーン監督は「アメリカの多くの若者は（戦争や歴史）真実を知らされていない」とテレビで語っていた。しかし、このことは日本の若者も同様である。とくに、学校の授業でも近代史になるとカリキュラムの関係でバタバタして結局のところなんのことやらである。そうした意味で「記憶をつなぐ」ことが、今の私たちに課せられた役割である▼「記憶」それは「事実」であり、つなぐことによって「歴史」になる。そして、未来へのかけがえのない「糧」となるのである。それは、国であれ、個人（家族）であれおなじである。幸せなことはもちろんのこと、不都合なことやイヤなこともである▼私たちの運動も今年5月に「90年」を迎えたが、今あらためて先人たちの思いや行動を受け止め、未来への地平を切り拓いていかなければならないことを自覚するものである▼秋になって夏のことを思い出したが、さまざまな情勢が危うい感じがする。そうした時、家族のこと、地域のこと、そして国の事実や歴史を考え、語ることが私たちにできる大事なことのような気がする。

（S・I）